天地

ネットワークテーブル　534号

天地シニアネットワーク　2022. 8. 16

TENTĪ　TO DAY			1
会員の広場			2
歴　　史	「了解日本（日本を知る）」（1）	兪彭年	2
歴　　史	徳川家康の外交顧問になったウィリアム・アダムス（三浦按針）なぜ、アダムスは家康に評価されたのか（4）	佐川雄一	4
歴　　史	台湾の歴史を学ぶ（5）	田口秀美	7
随　　想	国立慕情（１６）	津田孚人	１０
事　務　局			１２

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

残暑お見舞い申し上げます

コロナ禍、熱中症、大雨、災いが一挙に列島を襲いこの先も油断できません。医療体制は危機的な状況、自分のことは自分で対処する覚悟が必要となりました。他人にお任せは、通用しなくなりました。 お互いに気を付けましょう。

****

旧統一教会の浸透が日本の政界に大きく進んでいるのに驚きました。知る人は知る、ということだったのでしょうが、不作為は問題です。日韓の不仲、齟齬も旧統一教会の影響があるためなのか、当局から詳しい説明があるべきです。「覚えていません」「忘れました」という言い訳ばかりの政治家には、期待は無理です。

****

かつて日本社会には、右顧左眄せず、自分の職分をしっかり守る「侍」がいました。昭和の時代にはいましたが、最近は、見当たりません。しかし、スポーツの世界では、「侍ジャパン」がいます。「侍」は「死語」ではありません。

****

米大リーグ、大谷翔平選手は、前人未踏の快挙を達成しました。大谷選手の才能を認め、常識外の二刀流を容認した、栗山前日ハム監督、「侍」です。今後、大谷選手のような異能の選手が出るかは、指導者如何です。「侍」の出現を期待します。

****

治療に通った病院の患者仲間３人で昼食をしました。自分の知らない自分のことを、いろいろ教えて貰いました。他人の情報も治療では大事のようです。

****

会　員　の　広　場

****

俞彭年著の「了解日本」「了解日語」(「日本を知る」「日本語を知る」)の「了解日語」**を以前、連載しましたが、八王子にほんご会・有志が、**「了解日本(日本を知る)」の日本語訳に挑戦し、6章までを送ってくれました。天地シニアで一部修正を加え、掲載することにしました。 **ただし、俞さんは哲学者、内容が高度なので、途中でダウンするかも知れません。**

「了解日本」(「日本を知る」　　俞彭年(85歳)

八王子にほんご会・有志:訳
天地シニアネットワーク:監修

前書き　中日両国の絆の文化的贖罪

中国は祖国、日本は第二の祖国です。日本と宿縁で結ばれた私の運命は、福あり、禍ありで、正に老子の「禍(わざわい)は福のよる所、福は禍の伏する所」のようだった。私は、戦前に日本に渡った中国系移民の子として1937年に東京で生まれ、敵国の子として辛く屈辱的な幼少期と思春期を過ごした。 日本が無条件降伏した後、日本にいた中国人が戦勝国の国民になったことで、私の家族の状況は改善された。

1953年秋、新しい中国に憧れて高校を中退して単身中国へ帰国し、1956年夏に大学に入学したが、第一志望の北京外交学院も第二志望の外国貿易学院も不合格で、大学入学のための条件を満たしていないことが後に判明した。
1961年の夏、私は復旦大学哲学科を卒業し、クラスで一番遅れて上海外国語学院のマルクス・レーニン主義教学研究部の哲学教師に配属された。 1963 年の夏、私はマルクス・レーニン主義部から日本語学科に異動になり、学業を放棄して日本語教師になることを余儀なくされた。
もともと、階級闘争が綱領だった当時、マルクス・レーニン主義の教育研究部門では、私に将来はない。 しかし、日本語教師になるのは簡単なことではなかった。 何しろ、高校 1 年までしか日本で勉強していない私が、そのレベルで日本語教師になれるわけがない。 日本語を独学で勉強し、言葉について学び、教授法を勉強しなければならなかったのだが、その過程で学んだ哲学がとても役に立った。

1966 年に文化大革命が始まると、私は革命の標的となり、「ブルジョア孝行息子、孫」「ブルジョア・修正主義教育路線の手先」「複雑な海外人脈と秘密工作員」「ブルジョア・修正主義教育者」という不可解なレッテルを貼られた。
「海外との複雑なコネクションを持つ秘密工作員の疑いがある」「政治的に信用できず、廃棄物としてしか使えない」等々、大文字のポスターを貼られて批判され、安徽省鳳陽五七幹部学校の第一陣の労働改造に回され、三ヶ月以上隔離され、最後は重大な政治的過ちを犯したと結論づけられた。
当時は、政治的な重大な過ちというのがどういうことなのか、本当によくわからなかった。長い間、宇宙人として辱められなければならなかった私の罪は何だったのだろう。自分がその時代の「欲加之罪、何患無辞」つまり、「罪を着せようと思えば，理由はいくらである」の具体例であることに気づいたのは、その後のことだった。

労働者、農民、兵士が勉強していた 1972 年の春、私は五・七幹部学校から学校に呼び戻され、「廃棄物利用」教師として再び教職につき、１１年後の 1983 年の夏、再び上海市人民政府外事弁公室に赴任することになった。政治的に信用できず、廃棄物としてしか使えない兪彭年が、市の重要機関で働くことになったのだから、これは当時間違いなくビッグニュースであっただろう。 私は、外交の仕事には向かないし、すでに軌道に乗っている日本語の教育や研究をあきらめるわけにはいかないと言い、恋人や親しい同僚からも、政治的な資格がない、将来また文革があれば、革命派の一員として非難され、間違いなく殺されると、行かないよう強く勧められたが、結局、行かざるを得なくなった。
後に、この異動は私の身に起きた改革開放政策の具体的な影響であったと理解し、当然、この時、私は更生し、名誉を回復したのであった。 そこから、教える立場から外務に転向し、仕事の対象が、日本語から日本に変わった。 そして私は、外務という非常に不慣れな仕事に慣れるために、一から独学で勉強を始めることになった。

1999 年春に退職し、その後、長崎県から長崎シーボルト大学の教員として採用され、学びながら教えるという新たなキャリアをスタートさせた。 長崎では中国語を教え、中国の現状を講義し、中国の近代化を研究する学生を指導した。 春休みには中国の改革開放に関するスタディーツアーを企画し、夏には学生を中国に短期留学させ、さらに中国語を勉強させた。
2008 年春、私は長崎シーボルト大学を定年退職し、大学からは名誉教授の称号を授与され、長崎県からは国際交流の功績が認められ名誉県民に選出された。 2016 年 11 月には、数十年にわたる日中友好のための活動が評価され、日本政府から旭日小綬章を授与された。

偉業を成し遂げた年月は濃密だった。16 歳で少年時代の故郷を離れ、62 歳で日本に教えに行った時には、私の髪は白髪になっていた。両親は外国で既に他界し、少年時代に覚えていた日本は近代化され、成熟した社会になっていた。 71 歳で中国へ帰国、祖国は既に聳え立つ大国になっていた。平坦ではなかった人生。 私は常に祖国と運命を共にし、日本も常に私と共にあった。
晩年は、日本についてもっと知ってもらおうと、上海市人民政府外事弁公室が編集する『上海外事』や上海外事翻訳家協会が発行する『翻訳家の友』に、日本に関する記事を書いた。
今回出版された『了解日本、了解日語』は、『了解日本(中国語)』は過去に発表した論文や未発表の論文を集め、『了解日語(日本語)』は長崎での教師時代に書いた日本語の研究書である。
私は上海国際大学(当時は上海外国語学院)で 20 年間日本語を教えたが、『高等教育日本語専攻』(第 1 巻～第 4 巻)の編集を終えた後、教育・研究のテーマは「日本語表現の心理学」に移り、1 年間の日本留学から帰国後、講座を開講できる時期に異動になり、研究が中断された。 長崎に教えに行った後、時間があったので研究を再開し、断続的に自分の考えを書き、大学の刊行物に発表してきたが、今回、日本語を教えたり勉強したりする人の参考のために、『了解日本語(日文)』に収録した。
本書の刊行にあたり、ご協力いただいた孫玉傑氏、明順氏に心より感謝申し上げます。

俞彭年

上海、2016 年 12 月

****

徳川家康の外交顧問になった　ウィリアム・アダムス(三浦按針)
なぜ、アダムスは家康に評価されたのか

佐川　雄一　　(84歳)

6. <u>リーダーとしての家康の秀逸さはどこにあるのか</u>

先ず、脳裏に浮かぶのは家康の持つ多様な人柄＝冷徹・非情・寛容さ、人を差別しない、義を重んじるである。又、ライバルの藩主を自己陣営に鞍替えさせるために文書を何百・何千通も書くなど説得力と忍耐力は抜群であった。家康は、1603 年、江戸幕府を開き、戦火のない平和な長期政権の基盤を整備したが、家康の秀逸さはどこにあったのだろうか。

6-1）**幕藩体制の採用**：

家康（1543～1616 年）が 1603 年、征夷大将軍に任命されると、およそ 260 人いた大名（藩主）と主従関係を結び、各地の大名には彼らが支配する領地（藩）の統治権を与え、幕府と藩主の 2 頭政治を確立、藩という中間媒体を通して民衆支配を実践した。併せ、参勤交代制度を採用し、大名の将軍に対する服属を儀礼化した。

参勤交代制度は、諸大名が江戸に在住する「参勤」と領国に戻る「交代」を 1 年交代で行う制度であるが、参勤交代で発生する膨大な費用が藩主の富財と軍事力の増殖を抑えるのに有効であったと言われる。

1635 年、第 3 代将軍、徳川家光によって制度化され、徳川幕府の終焉まで続くが、最大の目的は藩主の幕府に対する忠誠心の確認であった。藩主には年に 1 度、将軍の居城に参内、将軍に恭順の意を表する慣習が強いられた。飴と鞭で藩主の忠誠心を維持し、幕府・藩主共存共栄の政治基盤を整備した。

6-2）**後継者の広域選別**：

徳川政権は、政権の長期安定化に向けて後継候補者を徳川将軍家に限定せず、紀州、尾張、水戸など分家を含めた幅広い選択肢から最適任者を選ぶシステムを創り上げた。265 年に亘った政権に 15 人の将軍が執政にあたったがすべて国家・国民を代表するに相応しい人格・識見を備えていたのか、疑問は残るが、将軍の背後には意見を述べるブレーンが存在し、家康の遺訓を守り、大きく道を外すことはなかった。

6-3）**非戦・善隣友好の国際関係堅持と国内政治の安定化を最優先した家康**

家康は、大航海時代に台頭した軍事侵略と植民地化に拍車をかける世界の動きに組することなく、非戦・善隣友好の国際関係を堅持し、且、国内政治の安定化を実現した第一級の政治家である。

ポルトガル・スペインにキリスト教の布教と交易を放任すれば、日本は、中南米・フィリッピンと同じく西洋列強の属国になるリスクがあるとして、家康は列強の思惑を聴取するために、ポルトガル・スペインの宣教師・商人、その後、オランダ・イギリスの商人の表敬・挨拶に対してはできるだけ時間を割いて積極的に対応した。

秀吉の下で朝鮮半島に侵略し日朝関係は冷却していたが、捕虜の返還問題に家康が前向きに対応、これが契機となって日朝間で国書の交換が行われ、その後、200 年以上にわたって続けられることになる朝鮮通信使外交の基盤を創った。身の丈に合った外交・貿易が幕府の原点にあったのではないだろうか。

家康が取り組む課題は広域に亘っていたが、アダムスが外交顧問とし家康を支えた。そして家康が得た西洋の情報・知識は、地域の有力藩主とくらべても圧倒的に勝り、外国人エキスパートとのネットワークにおいても突出していた。この辺りが徳川政権の基盤整備につながったものと考える。

国内基盤が固まったところで、家康と彼の後継者、秀忠と家光は、熟慮の末、キリスト教布教の禁止と宣教師の追放に踏み切った。さらに、多国との交易を続ければ、外様大名がポルトガル/スペインと組んで幕府政権の崩壊を企てるリスクがあると考えたのか、交易パートナーをオランダ（と中国・朝鮮）のみに絞る鎖国政策に踏み切った。なぜ、オランダだけが残ったのか。彼らにはキリスト教宣教師との表裏一体の関係が見られなかったからである。

7. **家康の逝去とその後のアダムス**

なぜ、外国人のアダムスが家康から日本の歴史上例を見ない厚遇を受けたのか。外交・宗教・貿易に係わる重要な問題、西洋の科学技術、これらの知識を持たずして日本の主権を守ることはきわめて難しいと考えた家康は、アダムスがこの要件を充たす最適の人材であると判断したのである。

家康はアダムスからどん欲に西洋について学び、アダムスも日本語、日本の文化・慣習の学習に力を注いだ。日本の歴史上、最高の外交手腕能力を備えた家康であるが、惜しくも 1616 年（4 月　17 日）,74 歳で逝去する。同じ年に、近代史上傑出した文学者ウイリアム・シェクスピアとミゲル・デ・セルバンテスが亡くなっている。

しかし、家康とアダムスの間に強い信頼関係が築かれていく姿をみた秀忠はアダムスに嫉妬心を抱き、アダムスに対する態度は、家康がアダムスに示した態度とくらべ、必ずしも濃密ではなかった。家康は、1613 年、英国商務館が設立された後も、アダムスに対し彼の側にいるよう要請するが、アダムスは商務館と契約を結び、生活の拠点を平戸に置き、家康から朱印状を発給してもらい、毎年のように東南アジア（シアム、コーチシナ―ベトナム中部、トンキン―ベトナム北部）に渡航した。

勿論、アダムスが、三浦半島・江戸を訪れれば、必ず家康とお会いしていたが、船長・航海士こそ、彼本来の仕事と考え、航海と交易に没頭したのかもしれない。

東南アジア旅行とも重複するが、英国商務館が沖縄との交易を開拓するために英国商船を 3 回沖縄に派遣したが、この内の 2 回はアダムスが船長であった。沖縄との取引は必ずしも上手くいかなかったが、アダムスは“さつまいも”を沖縄から初めて日本に紹介した人として知られている。

アダムスは、家康の死から 4 年後の 1620 年（5 月 16 日）、英国商務館員が見守るなかで、平戸で生を終えた。享年 55 歳。遺体は平戸で埋葬された。死の直前、アダムスは平戸の商務館長：リチャード・コックス立ち会いのもとでと商務館員：ウイリアム・イートンの筆録で詳細な遺書を作成した。遺産の半分を英国の妻子に、残りの半分を三浦半島に残した日本で生まれた二人の子供（ジョゼフ、スザンナ）に与えた。

その他に多数の所有物があったのでこれまでお世話になった三浦半島・平戸在住

の日本人とイギリス商館員の友人に分け与えた。遺書が作成された日の午後アダムスはこの世を去った。コックスは遺産執行人としてアダムスの遺産が遺書通りに各人に配布されるよう責任を果たした。

最後に

日本の近代史において、ウイリアム・アダムスほど、国政の指導者に影響を与えた外国人がいたのだろうか、そして徳川家康ほど外国人の能力・経験を最大限活用し、国政の場で役立てた為政者がいたのだろうか。異国人との出会いがこれほどまでに国政統治者にインパクトを与えた、この事実は、現代においても新鮮である。

アダムスが日本で獲得した地位は前代未聞のものであり、同時代の外国人・日本人の驚異と感嘆を呼んだ。英初代商館長リチャード・コックスがアダムスの逝去後、東インド会社にあてた手紙のなかで書いている。『船長 ウイリアム・アダムスのような人物を失ったことは真に悲しむべきことです。彼はこの地（日本）に来たいかなるキリスト教徒よりも深い寵愛を二人の皇帝（家康、秀忠）から受けました。彼は多くの大名が許されずに外で待っているときでも、自由に部屋に入り、皇帝と話すことができました-----』

****

「台湾の歴史を学ぶ」（５）　　田口秀美（７２歳）

（『八王子市南大沢　歴史の会』所属）

④　清朝時代（３）

当時の日本において「アヘン戦争」の情報は、オランダと中国の貿易商人から長崎を通じて伝わってきました。「アヘン戦争」の発端は、イギリスから、中国に輸出した綿糸府などの輸出数量が増えず、反面、中国からイギリスへの紅茶の輸出が大幅に増えて、イギリスの輸入超過になりました。紅茶の輸入代金の銀の不足から、イギリスの植民地インドで栽培したアヘンを中国で販売し、得た銀を輸入代金に使用しました。

1835 年には、中国のアヘン中毒者が 200 万人以上になり、多くの国民の健康が害され、経済も深刻な事態となって、アヘンを禁ずるべきという世論が高まりました。清国政府は、糊広総督・林則徐を特命全権大臣に任命して対策にあたりました。

1839 年、林則徐全権大臣はイギリス商人とアメリカ商人が保有していたアヘン 2 万箱を没収して焼却処分しました。このことを発端として、戦争の機会をうかがっていたイギリスは、1840 年、軍艦 16 隻、武装汽船 4 隻、輸送帆船 27

隻、インドと喜望峰に待機していた陸海軍 15000 人が攻めてきました。

林則徐大臣は、広東省の珠江岸に 300 門の大砲を配備、河口に杙を打ち備えていたため、押し寄せたイギリス軍は広東省の攻撃を諦めて北上、浙江省の舟山島を占領し、定海の町に入り、北京を目指して北上をはじめました。この時点で、清国政府の有力官僚から林則徐の政策を批判する意見が出て、林則徐は解任され、清国政府から任命された欽差大臣・琦善がイギリス軍と交渉にあたりました。一切の防備を取り除き、抵抗していた人民に武装解除を命じ、アヘンの取り締まりも緩めましたが、イギリス軍のジョージ・エリオット総司令は納得せず、広州東部の川鼻砲台を攻撃、占拠しました。

そこで、イギリス軍は、香港島の割譲、戦費賠償金の支払い、対等の外交関係、広州市場のアヘン取引の再開を要求。清国政府の欽差大臣・琦善は承認しました。しかし、清朝の皇帝は、この「川鼻仮条約」を許さず、あらためて軍を派遣しましたが清国軍は敗れ、イギリス軍は広州に攻め入り、ほしいままに略奪、放火、暴行、殺人を行いました。

1841 年 5 月には、三元里という村でイギリス軍が略奪をはたらいていた際に、ドラの音を合図に近隣の村から数万の村人が槍や鎌を持って取り囲み、イギリス軍は 200 人程の死傷者を出して、清国政府の役人のとりなしで脱出したという「平英団」の戦いの記録があります。

イギリス軍は上海を目指して揚子江をさかのぼり、やがて上海城内に司令部をおいて、領土割譲を含めた講和条約を結ぶまでは戦闘をやめないと声明を発しました。上海城内ではイギリス兵による略奪が続きました。イギリス軍は揚子江から南京に攻め寄せ、南京の江岸に停泊中のイギリス軍艦の艦上で、1842 年 8 月 29 日、中国とイギリスの講和条約が締結されました。「南京条約」です。香港島の割譲と、戦費の支払いと、イギリスの商人の貨物の関税率は協議によって定めることなどの条約が締結されました。

「アヘン戦争」の顛末は、林則徐の友人であり、戦闘にも参戦した学者の魏源によって書かれた「海国図志」に詳しく記されています。「海国図志」は日本で広く読まれ、当時の日本人は大清帝国を襲った災厄に衝撃を受けました。日本の学者が、幾人も「アヘン戦争」の研究、論評の本を出版しています。1842 年（天保 13 年）に、仙台の斉藤竹堂が「鴉片始末」を出版して広く読まれました。1847 年（弘化 4 年）には、佐藤信淵の「水陸戦法録」が出版され詳しく報告、論評しています。

宮内省図書寮には、「阿片戦争風説書」（1840 年・天保 11 年）が残っています。水戸藩の藩校・彰考館資料には、「阿片顛末」の写本が残ります。また、東京大学史料編纂所には、薩摩藩・島津斉彬自筆の写本、「鴉片戦争記」が保管されて

います。

1844 年、オランダ国王から「日本国王」（天皇）に、「開国勧告状」が届きました。その中で、イギリスの中国侵略の経過が詳しく説明されて、日本がそのような災害を避けるために異国との貿易の禁止を、緩めますよう、と記されていました。1846 年、孝明天皇から海防について幕府に勅諭が下されました。強い危機感を表しています。

長崎には、幕府の奉行（行政官）が常駐しており、各藩も行政官を駐在させて外国の情報を収集していました。「アヘン戦争」の情報の衝撃は日本中に広がり、海からの侵略に備える大砲の製造のため鉄、銅を精錬する「反射炉」が、薩摩藩、佐賀藩、長州藩、水戸藩、幕府直轄領の伊豆韮山などで、建設されました。

1853 年、アメリカのペリー提督が、1 年後に条約の締結したい、と告げて去ったあと、日本の対処をめぐって日本中に議論が沸騰しました。幕府の老中・阿部正弘（39 歳）は、全国の藩主、藩士、民衆に意見を募るという、これまでの幕府には考えられない政策も公示されました。

その一方で、日本のあり方や対外政策に関して意見を公表した学者、思想家が捕縛（逮捕）され、処刑されました。高野長英、渡辺崋山、橋本左内など貴重な人材が犠牲になりました。

孝明天皇と公卿（天皇家と古来姻戚関係を結ぶ家系の人々）の会議も議論を重ねましたが、基本的には、外国との交流を慎重にするように幕府に提言、指示しました。

しかし、1854 年、再び訪れた、アメリカのペリー提督と日本・江戸幕府は「日米和親条約」を締結しました。条約締結により、アメリカの船舶が下田、函館、横浜、長崎、新潟、兵庫の港に入港し薪水の供給を受けることができることになりました。領事が駐在することになりました。

この条約を締結したことについて、議論が沸騰しました。条約締結を担当した井伊直弼大老（行政長官）への批判的意見が多く流布し、幕府は過敏になり国の困難な状況を憂いた意見、思想を論じた学者を弾圧して、吉田松陰など後世に功績を残した学者、思想家が犠牲になりました。

条約締結への主な批判の趣旨は、「国の元首である天皇の認証を受けていない。」、「不平等な、日本にとって不利な内容の条約である。」、などと言われます。しかし、孝明天皇と公卿の会議は、なかなか結論が出ず、基本的には外国を受け入れないようにせよ、との指示でした。また、海外の条約の現状などの情報が不足していた、という状況でもありました。

江戸幕府は、1860 年 2 月（万延元年）、外国奉行（外務大臣）新見正興に、監査役・小栗上野介、その他、仙台藩士、佐賀藩士、長州藩士、土佐藩士、隈本藩士など、約８０名が随行し、「日米修好通商条約」本書の批准交換のためアメリカへ派遣しました。アメリカの軍艦に乗船して品川から旅立ちました。幕府の軍艦「咸臨丸」（勝海舟船長）が同行しました。
しかし、その 3 月、大雪の降る朝に井伊直弼大老は、江戸城に出勤途中で元水戸藩士、元薩摩藩士によって殺害されました。
（つづく）
****

国立慕情（16）　　津田孚人（85歳）

夏の高校野球が8月5日にスタートし、連日熱戦が続いている。今年の入場行進は、主将1名のみの参加だったので、多くの選手の顔を見られず残念でした。選手にとっても一生の宝物となるはずの体験ができず、残念だったに違いない。
入場行進にはいささか不満がある。参加者全員が、大会関係者の指示のままに一挙手一投足、整然と動くのに、いつも不自然さを感じる。時には、息苦しさを感じる。
1964年の東京オリンッピク、閉会式は、国別の入場行進が、各国選手が入り混じってバラバラの入場行進となり、日本の旗手は、外国人選手に肩車されて行進した。行進は、大会関係者の意図するところではなかったようだが、選手のみならず内外から大好評だった。冷戦の最中の画期的な出来事だった。

昨今の、政治の混迷を見ると、権力者の上からの絶対的な指令には、常にリスクを感じる。第二次世界大戦での日本の敗北、知れば知るほど、権力への絶対的な依存は、危険。甲子園の高校野球の入場行進に、昭和十八年、神宮外苑競技場で行われた、学徒出陣の幻を見る。たかがスポーツ大会の入場行進と、単純に見逃せない。
最近古本市で 「学徒出陣」（蜷川壽恵著・吉川弘文館歴史ライブラリー）を見つけたが、次のような短歌が紹介されていた。
聖火燃ゆるグランドも彼の日は雨なりき君出で征きし20年前
この歌は、「朝日歌壇」での入選作。1964年の東京オリンッピクの入場式を見ながら昭和18年（1943年）10月21日、冷雨の中、銃剣を担いだ出陣学徒が泥しぶきをあげながら同所を行進していった忘れがたい人たち、を思い出して詠まれたもの。この時の選者、五島美代子、近藤芳美、宮柊二、の3人は、この短歌を入選句として皆選んでいる。

教育的な意味合いもあるせいか、日本人は、集団での行進が好きなように見える。戦

前の「学徒出陣」に、ノスタルジーを感じる人も多いせいなのかもしれない。
高校時代の恩師を見舞った時（2018年11月）に、徳寿記念の手拭を頂いたが、
　去にし日に　神宮外苑出陣の　学徒の老いて　96才
と短歌が織り込まれていた。生前、学徒出陣など体験談を聞くことはなかったが、母校の75周年記念誌への寄稿文には「昭和18年3月、札幌師範卒業、4月、東京高師入学。10月、学徒出陣あるも、高師生はなお徴兵延期の故を以て、見送る側の席に着く」とあった。

「学徒出陣」とは、如何なるものだったのか、「学徒出陣」（蜷川壽恵著・吉川弘文館歴史ライブラリー）で見てみた。
　昭和16年（1941年）12月、日本が米国・英国との戦争が始まり、当初日本に有利だった戦況も、開戦2年目から次第に不利になり、昭和18年になると国民の眼にもおぼろげながら敗戦に向かっていることが感ぜられるようになった。広域に広がっての兵員の損傷は甚だしく、それを補うために勉学途中の大学生、高等学校生、専門学校生の徴兵猶予を停止して兵役に服させ、戦線に送ることにした。それが学徒出陣で、その第一陣が昭和18年12月に入隊することになった。
　入隊を控えたこれら学生、生徒のうち、首都圏にある1都3県の77校に在学する学徒を、10月21日に明治神宮外苑競技場（現国立陸上競技場）に集め、その壮行を激励すべく文部省、学校報国団本部主催で開かれたのが、出陣学徒壮行会であった。

さらに、実際に参加した人たちの「学徒出陣」由来書から。
●平成5年（1993年）10月、生還した出陣学徒の有志が建てた、国立競技場千駄ヶ谷入り口の「出陣学徒壮行の地」に書かれた由来の記。
　「昭和18年（1943年）10月2日、勅命により在学徴集延期臨時特例が公布され、全国の大学、高等学校、専門学校の文科系学生・生徒の徴兵猶予が停止された。この非常措置により、同年12月、約10万の学徒がペンを捨てて剣を執り、戦場へ赴くことになった。世にいう「学徒出陣」である。
全国各地で行われた出陣行事と並んで、この年10月21日、ここ元・明治神宮外苑競技場においては、文部省主催の下に東京周辺77校が参加して「出陣学徒壮行会」が挙行された。折からの秋雨をついて分列行進する出陣学徒、スタンドを埋め尽くした後輩、女子学生。征くものと送るものが一体となって、しばしあたりは感動に包まれ、ラジオ、新聞、ニュース映画はこぞってその実況を報道した。翌19年には、さらに徴兵適齢の引き下げにより、残った文科系男子および女子学生も、軍隊にあるいは戦時生産に動員され、学園から人影が絶えた。時流れて半世紀。（以下略）」
●東大十八史会編：「学徒出陣の記録」。そのときの情景を書いた、参列一学徒の追憶記。

昭和18年10月21日、私たちにとっては思い出深い日である。迫りくる苦難の日々を象徴する如く、東京の空は低く垂れこめた雨雲に覆われて、出陣学徒壮行会の行われた明治神宮外苑競技場には、秋雨が冷たく降っていた。
分列行進の先頭をつとめた東京大学の校旗は白地に「大学」と紋章型に記しただけのものであったが、それだけに厳粛で凛然とした感を与えた。スタンドは理科系学生や女学生など見送る学生で埋められていた。送る者も送られる者も、戦況の不利を思い、祖国の前途を思うと悲壮であった。その後の2年近くの歳月のなかで、冷雨の中を校旗を奉じて粛々と進んだ隊列の中からも、雨にうたれて友を見送ったスタンドの中からも多くの青春の霊は、はるかなる山河に眠って再び帰らぬ人となった。

先日、NHKスペシャルでも2時間番組で「学徒出陣」を取り上げていた。実際に参加し、そののちに悲惨な体験をした学徒は、どんどん少なくなっていく。ロシアのウクライナ侵攻で、戦争が身近なものとして驚き、関心を持つようになった若者が増えている。若者に歴史を語り継ぐ必要性はあります。自分なりの体験、あるいは歴史観を改めてまとめておきたいものです。

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
〒116－0001荒川区町屋3－2－1
ライオンズプラザ町屋703
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電　話・FAX　　03-3819-7651